

よりよい教育研究環境を

有 馬 朗 人

臨教審を始め、世論は大学および大学院のあり方について大変にぎやかである。しかしこのような声を待たなくとも、我々自身が大学や大学院が今のままで良いとは全く思っていない。大学の多様化、国際化は、まさに我々自身が機会あるごとに言って来たことである。にもかかわらず、今日では世論によって批判される状況である。これは一方では大学側の対応の悪さもあるが、ゼロシーリングのマイナスシーリングのという雰囲気の中で、大学の研究教育の発展が大いに阻害されているのが本当のところである。

一方巨大科学のみならず中小科学も研究所に集中的に投資が行われている。大学では1億円の特別設備費がなかなかとれないのに、一方では200億500億という話がどんどん進んで行く。

私は数年前発表論文数を一つの尺度として種々な研究機関の生産性を調べた。その結果大学特に東京大学の能力は、他の研究機関に比べて高いことがわかった。しかしこの状況は研究機関の活性化に重点が置かれ、大学の予算がゼロシーリングのままで進行すれば、早晚逆転するであろう。ここで一つ提案したいことは各教室で自分達の実力をもっと宣伝することである。各研究所がパンフレットなどを作っていくに努力をしているか見習いたい。また論文、特許、被引用度などから、各教室が他の研究機関に対して如何なる地位にあるかを把握し、その実力を示して社会にうたえたいと思う。もはや東京大学がだまっていれば日本の主導者である時代ではないことを認識する必要がある。

大学院についても分子科学研究所を中心に総合大学院構想が急速に進行している。その構想はまさに我々が理想としたものを多く含んでい

る。本来研究を集中的に促進するため、我々も協力してそのような研究機関の充実に協力して来た。その間大学特に学部側はかなりがまんをして来たのである。私は総合大学院に反対を唱えようとは思わない。ただし大学特に学部の研究環境を研究所並みに充実して欲しいのである。

今研究環境について述べた。他の一例を挙げよう。今日は国際交流ばかりである。口を開けば国際交流と誰も彼も題目を唱える。その実国際交流を行うために、我々大学人に自由な財源は殆どない。森垣総長は今年4月の入学式で学術研究において、日本は世界に借りがあり、それを返却しなければならないことを力説された。私は大変我が意を得たと思ひ嬉しかった。しかしひるがえって我々の現状を見たとき、まことに忸怩たるものがある。多数の外国の博士研究者が、一、二年東京大学で研究したいと言って来ても、我々には日本学術振興会に頼むか、文部省留学生に応募してもらうかしか方法はない。どちらもきわめて可能性は低いし、その決定に関して我々には全くの権限はない。これは日本全体の問題であるが、一方外国人客員部門や、学振による枠に存る研究所と学部の差が私には我慢できない。昨年理学部は数学教室よりの外国人客員部門の要求を出した。しかし実現には到らなかった。その最大の原因は研究所ならともかく、学部にはその例が殆どないことである。我々理学部の教官殆どは、外国の支持のもとで外国における研究生活を送った経験を持っている。森総長の言われるように今こそその借りを返さなければならない。国際交流を促進するため外国人客員部門が理学部に設置されることを望む。

やっと科学研究費で外国人に滞在費を払えるようになったのは、一大進歩である。最近まで

パー・ディエム（日当）を出すのは大変むづかしかった。しかし今でもその額は本当に僅かである。外国人から東大を訪ねたいという手紙をもらう度、私は金策にかけまわらなければならぬ。外国人にとって訪ねればパー・ディエムをもらうのはあたり前であるからである。ある外国人が来たとき、ある学部にとのんで講演謝礼金を包んでもらった。帰って来てその男はかんかんにおこって私に言うには「私の講演は一泊の費用の半分にもならないのか。君達が私の大学へ来たら、宿泊と生活費はいつでも十分出さだろう。」私はただ日本の後進国性について述べるだけであった。私は東京大学理学部は、このような面で世界に恥かしい存在であると思う。せめて共同利用研究所並みになれないものであろうか。

私は大学全体そして理学部の研究がソフト化しつつあるのを怖れている。その原因は初めに書いたように、設備が十分に得られないためである。1に費用が得られないこと、2に十分の維持費が得られないこと、3に置く土地があまりにも窮屈なためである。私は自然科学はまず自然に触れることであると信じている。巨大科学は集中的に投資が必要であらう。しかし何故もっと小さな生物や分子科学そして物性科学まで中央化されなければならないのであろうか。再び言う。一方で何十億何百億の話、日米科学協力など大規模なものはどんどん進む一方、もっと基本的な、大学が一番向いている小規模の研究が何故阻害されなければならないのであろうか。

今天文台が独立して国立研究所になる話が急速に進展している。また早かれ遅かれ原子核研究所が独立する計画が議論されるであらう。どちらの場合も大規模な設備を必要とし、そのためには国立研究所でなければ実行できないという情勢のためである。どうして大学ではできないのであろうか。独立すれば出来るくらいなら、特別の枠で他の学部を圧迫せずに、このような

大学附属研究所の改善が出来ないものであろうか。

私は一年間理学部の運営のお手伝をしていて理学部のあり方にも考えさせられる面があった。それは研究教育分野の細分化の方向へは行きやすいのに、一方で統合が大変むづかしいことである。齒に衣を着せずに言わしていただければ、生命科学や地球科学の細分性である。今や時代の寵児であるこの分野は、果して現在のような先祖伝来の分類法でよいのであろうか。しかし東大理学部の建物の分散の仕方を見ると、直ちに私の齒に衣を着せない批判は、ひっ込めざるを得ないのである。一号館、三号館、五号館に分散する地球科学諸教室、二号館、三号館、一号館の生物科学諸教室。私は科学教育研究の健全な発展が、このキャンパス問題のため著しく阻害されていると思う。

新キャンパスか、再開発か、両方やるか。遺跡問題をどう片付けるのか。キャンパス問題は遅々として進まない。立川移転問題の失敗にこりた我々は、なかなか新キャンパスについて突進する気になれない。しかし再開発もまた煮え切らない。私はこのため理学部の若い教官達があきらめ気分になることを恐れている。

私は東京大学理学部の実力を信じている。その総力を結集して、我々独自の進展の方法を探りたい。研究は研究所で、教育は学部でという時流に全力を挙げて反対したい。一流の研究が出来ない環境で、最先端の基礎科学の教育ができるとは私は信じない。東京大学理学部が教育と研究において、真に世界の中で独自性を主張できる環境を得るべく、皆様の蹶起をうながしたいのである。そのためにはだまっていけない。あらゆる機会に世にうったえる一方、我々が真に世界を主導する研究及び教育での成果を挙げなければならない。理学部が本当に面白い計画を出せば援助すると励ましてくれる人々が多数いることを書き加えておく。